

曲目解説

寺西基之(音楽評論家)

C.P.E.バッハ：ソナタ ト短調 Wq.135 ~オーボエとハーブのための

これは本来オーボエと通奏低音(バロック時代特有の伴奏声部で、通常チェンバロおよびチェロなどの低音楽器が受け持つ)のためのソナタである。カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ(1714-88)は大バッハすなわちヨハン・セバスティアン・バッハの次男で、18世紀半ばには父を凌ぐ名声を博し、プロイセンのフリードリヒ大王の宮廷音楽家として活動した後、ハンブルクの音楽総監督という重職を務めた。バロックから古典派への過渡期に果たした役割は大きく、当時の多感様式を代表する作曲家でもあった。

このト短調ソナタ(本日は通奏低音声部をハーブで演奏)は以下の3楽章からなる。第1楽章(アダージョ)はゆっくりした流れの中でオーボエが装飾的な動きを施した旋律を情感豊かに歌っていく。第2楽章(アレグロ)は逆付点リズムを生かしたきびきびした楽章。第3楽章(ヴィヴァーチェ)では主題と3つの変奏。変奏といっても低音声部の反復の上で上声に変化する形をとる。最後に再び最初の主題が回帰して閉じられる。

J.S.バッハ：パルティータ ト短調 BWV1013 ~独奏オーボエのための

ドイツ・バロック最後の巨匠ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685-1750)によるこの作品は本来独奏フルートのためのパルティータ(イ短調)だが、元々別の楽器のために書かれたものをフルートに直したとも考えられており、本日のようなオーボエが原曲である可能性も否定できない。たったひとつの旋律楽器から多声的な効果を生み出す書法は、彼の有名な無伴奏ヴァイオリンや無伴奏チェロの作品にも共通する。バロック時代のパルティータとは舞曲を連ねた組曲で、この作品も4曲の舞曲でなる。

第1楽章(アルマンド)は16分音符の連なりで形作られている。第2楽章(クーラント)は生気溢れる運びのうちに複数の声部が浮かび上がる。第3楽章(サラバンド)は情感に満ちた荘重な楽章。第4楽章(ブーレ・アングレーズ[イギリス風ブーレ])は軽快に躍動する終曲。

シュポア：幻想曲 ハ短調 Op.35 ~独奏ハーブのための

19世紀前半のドイツの音楽家ルイ・シュポア(1784-1859)は生前絶大な名声を

博し、ドイツ音楽界に大きな影響力を持った。ドイツ随一のヴァイオリニストとして知られ、ドイツのヴァイオリン流派の祖として歴史に名を残すとともに、指揮者としても主要なポストを歴任、特に1822年にカッセル選帝侯の宮廷楽長に就任して以後は長年この地位にあり、1847年にはカッセルの町の音楽総監督の地位も得た。作曲家としても大変な多作家で、あらゆるジャンルの作品を手掛けている。

彼は1806年には名ハープ奏者ドレッテ・シャイドラーと結婚したこともあり、ハープのための曲も残している。この「幻想曲」は結婚の翌年に夫人のために書かれた曲で、アルペッジョを中心とした即興風の部分と古典的な明快さを持つ部分が交替しつつ発展する佳品である。

J.S.バッハ：ソナタ 八長調 BWV1033 ～オーボエとハープのための

このソナタはJ.S.バッハ作のフルートと通奏低音のためのソナタとして伝えられてきた。それは次男C.P.E.バッハが父の作と記しているからだが、作風はJ.S.バッハらしくはない古典的な平明な性格があり、今日では彼の指導のもとで次男もしくは弟子が書いたとする見方が有力である。本日はオーボエとハープで演奏される。

第1楽章(アンダンテ～プレスト)は伸びやかな前半と動きに満ちた後半からなる。第2楽章(アレグロ)は疾走するように運ばれる。第3楽章(アダージェット)は短調の情感に満ちたカンタービレ楽章。第4楽章(メヌエット)は簡明優美な第1メヌエットに変化に富む第2メヌエットが挟まれる。

サン＝サーンス：ソナタ 二長調 Op.166 ～オーボエとハープのための

オーボエとピアノのために書かれたこの作品は、フランス作曲界の重鎮として活動したカミーユ・サン＝サーンス(1835-1921)の最晩年の作である。彼はオペラ中心だった19世紀フランスの音楽界において器楽の振興に力を入れた。その彼が死の年の1921年に自身の創作活動を締め括るかのようには管楽器とピアノのために3曲のソナタを書いた。そのひとつが本日のオーボエ・ソナタで(他の2曲はクラリネット、ファゴットのソナタ)、80歳代半ばの所産ながら簡潔な清澄さの中に洗練されたセンスを示した名品だ。本日はピアノ・パートをハープで演奏する。

第1楽章(アンダンティーノ)は透明で簡素な主部とさざめくような中間部からなる。第2楽章(アレグレット)は小節線なしで自由に吹かれるのどかな牧童の笛のような前奏と後奏の間に、穏やかながらも躍動的な舞曲風の主部が置かれる。第3楽章(モルト・アレグロ)はフィナーレに相応しい軽妙で華麗な盛り上がりを見せる。

PROGRAM NOTE

ブリテン：『オウィディウスによる6つのメタモルフォーゼ』 Op.49 ~独奏オーボエのための

20世紀イギリスが生んだ大作曲家ベンジャミン・ブリテン(1913-76)が1951年にオーボエの名手ジョイ・ボートンのために作曲したこの作品は、古代ローマの詩人オウィディウスの『変身譚』に想を得たもので、古典神話の6つの物語をオーボエ独奏で描出している。メタモルフォーゼとは変身や変容を意味する。

第1曲「パン」は、水の精シランクスが牧神パンの愛を拒んで葦に変身するが、パンはその葦で笛を作って吹きながら彼女を偲ぶという物語で、拍節感のない動きのうちにどこか悲哀感を漂わせている。第2曲「フェートン」は日輪馬車を一日中乗り回すフェートンがゼウスの雷でパドゥス河に突き落とされる様を描く軽快な曲。第3曲「ニオベ」は神の怒りゆえに14人の子供を失って山に変身したニオベの悲嘆を表現する。第4曲「バックス」ではバックスの饗宴における女たちのおしゃべりと少年たちの歓声が聞こえてくる。第5曲「ナルキッソス」は水面に映る自分の姿に恋をして花に変身してしまう美少年の物語。本来の自分と水面の映像を音高の違いと鏡像形にひっくり返した音型によって描出している。第6曲「アレトウーサ」は河の神アルフェウスの愛から逃れて泉へと姿を変えるアレトウーサをアルペッジョ風の音型の連なりで幻想的に描いている。

フォーレ：即興曲第6番 変ニ長調 Op.86 ~独奏ハープのための

ガブリエル・フォーレ(1845-1924)はサン＝サーンスとともに近代フランス楽派の道を拓いた作曲家で、パリ音楽院の教授(のちに院長)としてもフランス音楽の展開に寄与した。優美で親密なスタイルの初期から深い思索性を湛えた後期へと作風は変化した、洗練された格調の高さ、叙情的な精神は終生変わることがなかった。

中期の1904年にハープのために書かれたこの「即興曲」も彼の音楽性が如実に現れた曲で、ハープの技法と美質を生かしつつ、流麗な運びのうちに表情の変化が織り成されていく名品である。フォーレ自身これをピアノ曲にも編曲しており、ピアノ曲としては即興曲第6番として知られる。

バスクリ：ベッリーニへのオマージュ~イングリッシュ・ホルンとハープのための

アントーニオ・バスクリ(1842-1924)はイタリアの名オーボエ奏者で、その圧倒的な技巧で“オーボエのパガニーニ”と呼ばれ、生地であるシチリアのパレルモを生涯本拠としながら、ヨーロッパ各地に演奏旅行を行なった。死後は一時期名前が忘れられていたが、ハインツ・ホリガーやオマール・ソボリなど現代の名オーボエ奏者が彼の作品を取り上げ

たことで、再評価されることになった。

バスクリはドニゼッティやヴェルディなどのイタリア作曲家による有名なオペラの主題を用いたオーボエやイングリッシュ・ホルンの作品を残しており、いずれも超絶的な技巧を生かしたものとなっている。イングリッシュ・ホルンとハープのために書かれた「ベッリーニへのオマージュ」もそのひとつで、ベッリーニのオペラ「清教徒」や「夢遊病の女」の主題を素材とした名技的な作品である。

INFORMATION

シアター・デビュー・プログラム
Young Theater-Goers Program

中学・高校生向け

Music Program TOKYO

Enjoy
concerts

2024年2月17日(土)・18日(日) 14:00 開演(13:30開場) 東京文化会館 小ホール

The Last Days of Maurice RAVEL

ラヴェル 最期の日々

公演詳細は
こちら



作曲家ラヴェルの苦悩に満ちた最期の日々を
ラヴェルの音楽とダンスと演劇で描き出す新作

音楽監督・作編曲：加藤昌則 演出・脚本：岩崎正裕

〈曲目〉

ラヴェル：ボレロ

亡き王女のためのパヴァーヌ

ツイガース

『マ・メール・ロフ』

他、ラヴェル作品等様々な作品から選曲、引用、新作を予定

〈出演〉

振付・ダンス：小尻健太

俳優：西尾友樹

ピアノ：加藤昌則

ヴァイオリン：橘和美優 *第19回東京音楽コンクール弦楽部門第2位及び聴衆賞

チェロ：清水詩織

バンドネオン：仁詩 Hitoshi



▶ 好評販売中

S席：5,500円 A席：4,400円 B席：売切 25歳以下(全席共通)：2,200円 18歳以下(全席共通)：1,100円

※25歳以下・18歳以下席をご購入の方は、公演当日に年齢が確認できるものをお持ちください。

▶ お申込み

東京文化会館チケットサービス 03-5685-0650 t-bunka.jp 他